Kobe University Repository : Kernel

タイトル Title	17〜18世紀におけるオランダ芸術とバルト海空間 (<特集>海港都市国際学術シンポジウム「越境する人々とナショナリズム」)(The Dutch Art of 17-18 Century and the Baltic Sea Space (International Symposium for Port Cities Studies "Transnational Movements and National Identities"))
著者 Author(s)	朴, 泯洙 / 呉, 美京 [訳]
掲載誌・巻号・ページ Citation	海港都市研究,5:149-158
刊行日 Issue date	2010-03
資源タイプ Resource Type	Departmental Bulletin Paper / 紀要論文
版区分 Resource Version	publisher
権利 Rights	
DOI	
URL	http://www.lib.kobe-u.ac.jp/handle_kernel/81002119

Create Date: 2017-12-18

17 ～ 18 世紀におけるオランダ芸術とバルト海空間

朴　　珉　洙
(Park Min-Soo)
(訳 ： 呉 美 京)

はじめに

‘芸術地理学（Kunstgeographie）’とは芸術と地理の相互関係を研究する学問であり、一定の地域における芸術様式の形成やより広い地域への伝播過程および経路、またその影響関係などに関心を寄せている。すなわち芸術地理学は、特定地域における芸術様式とその類型を社会的、経済的、個人的、心理学的要因と結び付けながら探求し、その成果を文化的、民族的、地理的アイデンティティと関連付けており、また異なる場所の間でこれらの芸術の転移と流通などについて考察する［Kaufmann 2004-1: 7 f., Kaufmann 2004-2: 9］。

本稿は、このような芸術地理学の観点と方法に基づいて、17 世紀オランダの美術発展とバルト海空間における伝播と普及について論じることを目的とする。バルト海は全体面積が 42 万平方キロメートルにおよぶ北ヨーロッパの内海であり、今日ではドイツやデンマーク、ポーランド、ロシア、スウェーデン、ノルウェー、フィンランド、そしてバルト 3 国など 10 カ国の国民国家によって囲まれている。バルト海空間は、早くからヨーロッパにおける諸民族の活動地であったが、特に 13 ～ 16 世紀には中世都市商人たちの同盟体である‘ハンザ（Hansa）’の主要舞台になり、海岸に沿ってハンザに属していた多くの海港都市が発展し今日に至っている。

バルト海空間は、ハンザが衰えた 17 世紀以降にも、商品交易と文化的交換が行われる主要現場として命脈を維持していた。この中でも文化的資産の交換は、文物が高度に発展した地域であった西部ヨーロッパ、特にオランダからバルト海空間の多くの海港都市を経て、より広い陸域へ分配される形態を取った［Krieger/North 2004: 2］。そしてバルト海空間におけるオランダ文化の普及と流通に、最も大きな役割を果たした海港都市はダンチヒであったが、18 世紀にはハンブルクも重要な都市として浮き上がってきた。

本稿では、まず17世紀に優れた文化資産を花咲いたオランダ地域の社会状況と、その固有な美術様相について概観し（Ⅰ章）、次いで中東部ヨーロッパにおいてのその伝播に関して述べる（Ⅱ章）。最後に、17～18世紀の2つの主要海港都市ダンチヒとハンブルクにおける、オランダ芸術の媒介と普及がどのように行われていたかを考察する（Ⅲ章、Ⅳ章）。

Ⅰ　17世紀におけるオランダの社会と芸術

1568年からスペインの圧制下に置かれていたオランダ人たちは、1579年複数の地域民結社であるユトレヒト（Utrecht）同盟を結んで本格的に抵抗し、1609年ついに独立を成し遂げてオランダ共和国を樹立した。共和国の内部からは政治的支配権を争って7つの州で葛藤が解消されなかったが、オランダ人たちは17世紀初頭から飛躍的な経済発展を積み重ねることにより、ヨーロッパの海洋強国として浮き上がってきた。17世紀オランダは、ヨーロッパ経済の最大中心地の1つであり、都市化の比率が最も高いのに対して、文盲率は最も低い国であった。また、相対的に宗教的寛容が大きく実現されており、学問の自由も保障されていたため、多くの国の学者や著述家、思想家たちが集まる文化中心地でもあった（オランダの‘黄金時代’）［North 2008: 37-65］。

17世紀オランダの繁盛のあり方を伺える他の要素は、造形芸術の画期的な発展であった。またこの分野における発展ぶりは、オランダの経済的な跳躍と決して無縁なことではなかった。経済と政治の領域が、地中海から北海や大西洋、そして遠くはインドまで拡張された17世紀ヨーロッパにおいて、オランダは先導的な地位を確保し、膨大な富をかき集めていた。豊かなオランダ市民たちは、投資対象の一つであり（上流層の生活を模倣した）かつ装飾物として、多くの人が美術作品を購買し始めた[1]。当時、市場経済が先進的に発展していたオランダでは、美術作品もたいてい芸術市場において売買されており、美術家たちは購買者の欲求に応じられる作品生産に腐心するようになった。その結果、オランダ絵画は芸術史的に空前絶後の多様性を花咲かせるようになったのだ[2]。画家たちは独特な

1　17世紀最初の10年間、オランダのデルフトにおいて世代当りの平均絵画所蔵数は10点であり、アムステルダムでは25点であったが、1670年に入るとそれぞれ平均20点と40点に増える。このことに関しては、［North 2008: 59］を参照されたい。

2　17世紀オランダの芸術発展に関する比較的詳細な説明は、［Huizinga 2007: 108-137］を参照されたい。

題材を探して風景画や海洋画、ジャンル画、静物画などの分野を本格的に切り開き[3]、自分ならではの専門分野に邁進しながら激しい競争を克服しようとしていた［North 2001: 135 f.］。

市場を狙った美術作品のこうした生産パターンは、絵画様式の革新をももたらしてきた。当代のオランダ画家たちは、線が鮮明で色彩対比がはっきりとした（したがって、製作に長い時間がかかる）技法を捨てて、灰色や褐色、黄色を主に使う‘色調主義（tonalistisch）’的画法を開発した。この技法により、芸術家たちは生産時間と費用を短縮することができ、立派な作品 1 点をたった 1 日で完成させたのだ。オランダにおける‘黄金時代’の独特な画風が誕生できたのは、こうした経済的な動機が大きく影響を及ぼしていた。17 世紀中頃、オランダの画家たちはこの技法を用いて 1 人当たり年間平均 94 点の絵を完成していた。当時、オランダでは 650 ～ 700 人の画家が活動していたので、毎年 6 万 5 千点余りの絵画作品がこの海洋国家から溢れ出たわけであり、こうした大量生産の過程で画家たちは外国販売へも関心を傾けるようになった［North 2008: 59］。

Ⅱ　17 世紀オランダ美術の中東部ヨーロッパへ伝播

17 世紀前半の中東部ヨーロッパは、30 年戦争（1618 ～ 1648）により、未曾有の混乱の中にいたが、外国での販売と活動に進んだオランダ人たちの文化的・芸術的な活躍は、全地域から着実に行われ、1648 年ウェストファーレン平和条約以降には、いっそう活発化された［Kaufmann 2004-1: 115 f.］。

まず、ドイツ民族の神聖ローマ帝国地域では、当時オランダハーグ出身の Adriaen de Vries がハーゲンとビュケブルク、ドレスデン、ヴォルフェンビュッテル市へ美術作品を調達しており、レワルデ出身の Hans Vredeman de Vries がヴォルフェンビュッテルで建築家として活動しながら多様な芸術品も製作していた。またユトレヒト出身の Paulus van Vianen が多くの芸術家と共にザルツブルクで活動していた。その他、アウクスブルクとインスブルック、トレントといった大都市はもちろん、多くの小都市と町でも Hubert Gerhard、Friedrich Sustris のようなオランダ芸術家たちが活動したことで知られている。特に 17 世紀初頭、フランクフルトアムマインではオランダ人たちが人口の約

3　勿論、題材選択のこのような多様化は、宗教改革を背景としている。カルバン主義の新教が勢力を伸ばしたオランダの芸術界では宗教化が衰えていき、世俗的素材が比較的自由に選択された。このことについては、［ツベタン ・トドロフ 2003: 11 f.］を参照されたい。

20％を占めていたが、この人たちは視覚芸術の発展に大きく寄与し、その中でも特に静物画を盛んにさせたと言われる［Kaufmann 2004-1: 117］。

そして、1612年まで神聖ローマ帝国支配者の居所であったプラハでは、皇帝Rudolf２世が多数のオランダ芸術家たちを後援していたが、彼の後援を受けながら作品活動を行ったオランダ人としては、前述したPaulus van VianenやAdriaen de Vries、Hans Vredeman de Vriesのほかに、Dirck de Quade van Ravesteyn、Roelant Saveryなどがいた［Kaufmann 2004-1: 120］。

30年戦争の直後には、Rudolf支配下のプラハに匹敵できるようなオランダ芸術の外地求心点は存在しなかった。17世紀中頃のハプスブルク王家のウィーン宮殿は、オランダ芸術の大きな影響下に置かれており、当時ここで活動していたオランダ芸術家たちはAdriaen van LierやSamuel van Hoogstratenなどがいた［Kaufmann 2004-1: 122 f.］。そして、プロイセン公国のFriedrich Wilhelm 2世は、17世紀前半オランダに留学しただけでなく、オランダ総督のFrederik Hendrikの娘と結婚した人物であり、オランダ芸術に対する造詣が深く、多くのオランダ芸術家を後援していた。彼の後援を受けていたオランダの画家・彫刻家たちとしては、Jan LievensやWillemm van Honthorst、Peter Nasonなどがいるが、彼らの作品は今日に至ってもポツダムのサンスーシ宮殿（Schloss Sans Souci）に多く残されている［Kaufmann 2004-1: 124］。

オランダの芸術は、ポーランドやリトアニア地方にまで伝播し、遠くウクライナのレンベルクにおいても人気を集めた。この地域では多様な経路を通じてオランダ芸術品が伝播されていたが、特に重要な役割を果たした中継地といえばダンチヒであった。この海港都市ダンチヒは東部ヨーロッパのブレスラウやクラクフ、チュラブノ、レンベルクなどと持続的な流通関係を結び合いながら、オランダの美術品を普及させていた［Wardznski 2004: 31］。

17世紀には多くのオランダの美術家・彫刻家・建築家たちが中東部ヨーロッパで活動したり、この地域へ作品を輸出したりしたが、特にオランダ芸術家たちの‘図案・設計集（Musterbücher）’が人気の中で流通されていた。その図案・設計集の中でも代表的なものといえば、1623年と1633年にアムステルダムで出刊されたHans Vredeman de Vriesの『遠近法（Perspectivae)』である。当時ヨーロッパでは、16世紀にイタリアで出刊された著作物、例えばLeon Battista Alberti、Andrea Palladioなどの芸術書籍物も普及されていたが、オランダ人たちの著作は何よりもその実用的な面から人気を集めていた。de Vriesなどの図案・設計集は、理論に傾いていたイタリア人たちの著作とは異なり、

実用的な技芸と応用に重点を置いた点から、各地の土着匠人たちに大きな人気を集めていた［Wardznski 2004: 26 f.］。

ところが、こうしたオランダ人たちの実用書がヨーロッパ、特に東ヨーロッパへ伝播されていく過程において核心的な役割を果たした中継地も、またダンチヒであった。したがってⅢ章においては、バルト海流域と東ヨーロッパへオランダ芸術が伝播するのに大きな役割を果たした都市として、海港都市ダンチヒについて詳しく述べる。

Ⅲ　17 ～ 18 世紀オランダ芸術の東ヨーロッパ伝播と、海港都市ダンチヒ

文化資産でありかつ経済産物としてのオランダ美術品は、17 世紀にバルト海域の諸海港都市へ流入して、そこから再び周辺の陸域へ伝播していった。この過程において仲介役割を果たした代表的な都市は、前述したように海港都市ダンチヒであった。

1466 年ポーランド王国に帰属されたダンチヒは、ルネサンス時期にバルト海域の中で最も盛んだ都市として絶頂期を味わい、18 世紀の中頃までも東ヨーロッパの中で人口が一番多い都市であった。16 世紀からこの都市は、ポーランド（18 世紀からは、またウクライナとリトアニアの）の穀物および木材をオランダを経由して西ヨーロッパへ輸出しながらも、逆に主要先進国家、特にオランダの贅沢品や文化資産を輸入し再びポーランドやロシアの全地域へ輸出する最も重要な海港都市であった［Olenska 2004: 91］。したがって、都市ダンチヒは、オランダと経済的な面において非常に緊密な関係に置かれており、オランダの物価が直ちにダンチヒの物価と連動するほど近い関係にあった［Kizik 2004: 55; ブローデル 1997: 355］。文化的な面においても、ダンチヒはこの国の莫大な影響を受け、文化の中継地かつ中心地としての役割を充実に果たしていた［Kizik 2004: 51］。

16 世紀からオランダ人たちは、宗教的な理由や経済的な動機により、ポーランドとプロイセン公国に多く移住してきたが、彼らの文化はポーランドの豊かな都市とプロイセン公国の裕福な地域で大きく受け入れられた［Kizik 2004: 51 f.］。そしてバルト海の海港都市ダンチヒは、ポーランドの内陸およびプロイセン公国と直接的に交流する核心的な文化仲介地であった。このような理由により、16 世紀の中頃からオランダの多くの芸術家たちが仕事や市場を求めてダンチヒに移住し、ここを媒介としてプロイセンとポーランドの多くの都市および宮廷へも進出した。例えば、オランダメッヘレン出身の van den Blocke 家門は、1583 ～ 84 年ごろダンチヒへ移住し、そこで芸術活動を広げた。特に、この家門出身の Willem van den Blocke は、ポーランド王の宮殿彫刻家として働きなが

ら、ジーベンビュルゲンの大聖堂にオランダマンネリズム風の主要な建築物を建てたりもした［Wardznski 2004: 32 f.］。

ダンチヒに作業場を置いた多くのオランダ出身の芸術家たちの作品は、遠く内陸へも販売され、人気を集めていた。その結果、17 世紀末にポーランド北部とプロイセン王国において、オランダのマンネリズム風の芸術が支配的な力を行使できるようになった［Wardznski 2004: 32 f.］。また、当時ダンチヒへ移住したオランダ人たちは、リトアニアのビルナとウクライナのレンベルクにまで進出し、芸術家の作業村を形成していたが、こうした作業村出身のオランダ建築家 Peter Honhardt と Martin van Dongen は、国王のために働いたこともあった。そして、このような彫刻家・建築家たちによってオランダ匠人らの図案・設計集も中東部ヨーロッパの内陸へ広がるようになった［Wardznski 2004: 34 f.］。

オランダの芸術品は、移住民によってダンチヒと東部ヨーロッパの作業場で産出されただけではなく、オランダから直接製作され、ダンチヒを経由し内陸へ輸送されたりもした。例えば、ポーランドの国王 Władysław4 世は、1637 年結婚式のためにオランダの芸術家たちに一群の青銅像を注文していたが、これをダンチヒを通じてワルシャワへ輸送させた。芸術品の収集家でもあった彼は、オランダに代理人を派遣しておいて、頻繁にオランダの美術品を購入していた。この際、ダンチヒの商人たちは国王のための仲介人でもあったが、輸送責任者としても重要な役割を果たした［Olenska 2004: 100 f.］。

国王 Władysław4 世の例から分かるように、17 世紀北部ポーランドの王族や貴族、富裕な市民たちは、オランダ美術品に対して強い関心を示していた。そうした関心から財産の多い王族や貴族は、オランダの現地まではいかないが、ダンチヒに代理人を常住させ、美術品の調査および購買、購買依頼を専門的に担わせた。そして財産の少ない貴族や市民たちは、ダンチヒの貿易商を通じて美術品を購入していたが、これらの貿易商の中で一部は、専門的な芸術商人として活躍したりもした。さらに、ダンチヒの代理人たちは貿易商や芸術商とも頻繁に協力し合ったが、貿易商や芸術商は再び他都市の商人や外国購買者を求めていたオランダの画家たちと接触を維持した。このようにして海港都市ダンチヒを中心に、広い地域にかけて購買者や代理人、商人、画家の間でネットワークが形成された［Manikowska 2004: 109-128］。ダンチヒを経由したポーランド上層部のこうしたオランダ美術品の購買は、1795 年この国の主権が失われるまで続いていった[4]。

4　ポーランドの最後の王 Stanislaw August Poniatowski は、オランダ美術品の愛好家であった。これに関しては、［Manikowska 2004: 115 f.］を参照されたい。

Ⅳ　18世紀西ヨーロッパにおけるオランダ芸術の人気と、海港都市ハンブルク

東部ヨーロッパとは違って、西部ヨーロッパでは18世紀中頃になってから、オランダの美術品が人気を集めるようになった。イギリスでは、オランダとの貿易が活発であった1745年からオランダ絵画に対する関心が高まり、次第にイタリア芸術についての愛好を圧倒し始めた。フランスにおいても、オランダ芸術品が美的価値の切上げを経験し、収集家の注目を集めたのは、18世紀中頃になってからである［North 2001: 123 f.］。ドイツの場合は、小公国と都市ごとにオランダの芸術が早くから知られていたが、この芸術についての関心が増幅され、その購買や収集が帝国の全地域で本格化されたのは、1700年代になってからである［North 2001: 126 f.］。

ドイツ民族の神聖ローマ帝国においては、17世紀末からバルト海の海港都市ハンブルクで、一早く芸術市場が形成されていた。この海港都市ハンブルクは、エルベ川とアルスター川の近くに位置されており、ドイツのほぼ全地域の芸術品売買と直間接的に結ばれていた［North 2004: 77 f.］。ハンブルクの芸術市場で取引された芸術品は、ほぼすべてが外国から輸入されたものであったが、特にオランダから伝来された作品が多かった。オランダとハンブルクとの間の交流は長い歴史を持っており、17世紀からはハンブルクの商人階層の多くの子弟がオランダの大学に留学したり、またこの地域へ教養旅行をしたりしていた。そして、ハンブルクの画家たちはオランダの各地で授業を受けており、多くのオランダ画家たちはハンブルクをはじめエルベ流域都市に定住して芸術活動を広げていた［North 2004: 78 f.］。

18世紀になって、ハンブルクの芸術市場から美術品を購入したドイツの収集家たちは、17世紀オランダの大家たちの作品に非常に強い関心を示していた。ハンブルクにおいてオランダの絵画収集に熱心であった主要な購買者としては、ハンブルク上院委員であり風景詩人としてもよく知られているBarthold Heinrich Brockesや、画家のBalthasar Denner、専門収集家のHeinrich Thielcke、そしてフランス出身の富裕なハンブルク市民のPierre Laporterieなどがいた。当時の主要な売買対象は、Rembrandt van RijnやJan Porcellis、Jan van Goyen、Willem van de Velde、Pieter Molijn、Anthony van Dyck、David de Heemといった、オランダ大家たちの肖像画や風景画、海洋画、ジャンル画、静物画、そして宗教歴史画などであった［North 2004: 79 f.］。

芸術市場の形成にともなって、専門的な芸術商人たちも登場してきたが、その典型的な人物としてハンブルクで活動したGerhard Morellが挙げられる。Morellは、バイロイ

ト侯国の宮廷画廊の責任者として経歴を始め、アムステルダムの芸術市場の商人たちと持続的な接触を持ちつつ、多様な階級の収集家たちに物品を調達していた。彼は、オランダから買ってきた高価な絵をドイツの諸地域の諸侯たち、もしくは市民収集家たちに売った。さらに Morell は、バルト海の北方まで活動領域を繰り広げ、デンマーク王のためにも働いていた。1750 ～ 60 年代、彼は何回もアムステルダムの芸術市場から美術品を購入し、デンマーク王室に調達した［North 2004: 84 f.］。

18 世紀のドイツにおいて、ハンブルクを中心としたオランダ美術品の普及は、ドイツの土着画壇にも影響を及ぼし、いわば‘オランダ画派（Hollanidisten）’を誕生させた。オランダの絵画様式および題材を積極的に受け入れながら、創作活動を行っていたこの画派は、第 2 の芸術市場が形成されていたフランクフルトを本拠地としていた。ここで活動した人物としては、Johann Georg Trautmann や、Friedrich Wilhelm Hirt、Christian Georg Schütz、Wilhelm Tischbein、Johann Conrad Seekatz、そして Justus Juncker などがいた。こうした人たちの作品は、この都市とハンブルク芸術市場において一定の人気を集めただけでなく、18 世紀のドイツ絵画の発展においても大きく貢献できた［North 2001: 130 f.］。

おわりに

以上、本稿では西ヨーロッパのオランダから、中東部ヨーロッパの多くの地域への芸術伝播について述べた。芸術地理学の方法と観点に基づいた本稿では、17 ～ 18 世紀のそうした文化的転移もしくは交渉現象によって、1 つの巨大な文化的疎通のネットワークが広大なヨーロッパ大陸で形成されていたと考察した。当時、そうした文化的転移と交渉過程においては、バルト海の 2 つの海港都市、すなわちダンチヒとハンブルクが非常に重要な媒介と仲裁の役割を果たしたことも述べられた。

オランダ芸術品は、文化的な産物でもあったが、時には緊要な経済的投資の商品でもあった。こうした産物は、2 つの海港都市を通じて中東部ヨーロッパの多くの陸域へ転移されていった。当時のオランダ芸術品に関するより具体的で詳細な転移経路は、17 ～ 18 世紀における多数の書簡や財産目録、もしくは競売物品の目録などから確認できる。しかしながら、このような資料は一部の研究文献[5]から間接的には引用できるものの、紙面上の

5　本稿で参考にした文献の中では、例えば［Kizik 2004］と［Wardznski 2004］。

制約もあり、詳しいところまで述べられなかった。

そして、当時のダンチヒとハンブルクの仲介により、中東部ヨーロッパへ伝播されたオランダの先進的な文化産物は、芸術品や建築のみならず、家具、室内装飾品、食器類など多様に存在していた［Heß 2004, Driesner/Riemer 2004］。当時、中東部ヨーロッパにおいては、２つの海港都市の媒介により、多様な領域にわたってオランダ文化の転移現象が現れていた。しかしながら、本稿は芸術産物の伝播と普及に焦点を置いたため、そうした文化交渉の側面まで述べられなかったことを了解していただきたい。

参考文献

フェルナン・ブローデル（페르낭 브로델訳） 1997 『物質文明と資本主義 Ⅲ -1: 世界の時間上巻』ソウル , プリとイパリ .

ツベタン・トドロフ (츠베탕 토도로프訳) 2003『日常礼賛：17 世紀オランダの絵画見直し』ソウル , カッチグルバン .

Driesner, Jörg / Riemer, Robert. 2004, “Spiegel und Bilder in den Nachlaßinventaren deutscher Kaufleute in Reval im 18. Jahrhundert”, in: M. Krieger / M. North (Hrsg.), *Land und Meer, Land und Meer. Kultureller Austausch zwischen Westeuropa und dem Ostseeraum in der Frühen Neuzeit*, 165-198.

Heß, Corina. 2004, “Mobiliar und Wohnungsauskleidung Danzigs im 17. und 18. Jahrhundert”, in: M. Krieger / M. North (Hrsg.), *ibid*, 129-152.

Huizinga, Johan. 2007, *Holländische Kultur im 17. Jahrhundert, aus dem Niederländischen von Werner Kaegi*, München.

Kaufmann, Thomas DaCosta. 2004-1, *Toward a Geography of Art*, Chicago / London.

Kaufmann, Thomas DaCosta. 2004-2, “Der Ostseeraum als Kunstregion: Historiographie, Stand der Forschung und Perspektiven künftiger Untersuchung, aus dem Englischen von Michael North”, in: M. Krieger / M. North (Hrsg.), *ibid*, 9-21.

Kizik, Edmund. 2004, “Niederländische Einflüsse in Danzig, Polen und Litauen von 16. bis 18. Jahrhundert”, in: M. Krieger / M. North (Hrsg.), *ibid*, 51-76.

Krieger, Martin / North, Michael. (Hrsg.) 2004, *Land und Meer. Kultureller Austausch zwischen Westeuropa und dem Ostseeraum in der Frühen Neuzeit*, Köln.

Krieger, M. / North, M. 2004, “Kultureller Austausch zwischen Westeuropa und dem Ostseeraum:

Eine Einleitung", in: M. Krieger / M. North (Hrsg.), *ibid*, 1-8.

Manikowska, Ewa. 2004, "Der Erwerb von Kunst und Luxusgütern für Stanislaw August Poniatowski und das Danziger Netzwerk", in: M. Krieger / M. North (Hrsg.), *ibid*, 109-128.

North, Michael. 2001, *Das goldene Zeitalter. Kunst und Kommerz in der niederländischen Malerei des 17. Jahrhunderts*, Köln / Weimar / Wien.

North, Michael. 2004, "Der Hamburger Kunstmarkt und seine Beziehungen in den Nord- und Ostseeraum", in: M. Krieger / M. North (ed.), *ibid*, 77-89.

North, Michael. 2008, *Geschichte der Niederlande*, München.

Olenska, Anna. 2004, "In Herzen des südlichen Ostseeraums: Danzig als Kunstzentrum und Vermittler fremder Einflüsse in Polen im Zeitaltere des Barock", in: M. Krieger / M. North (Hrsg.), *ibid*, 91-108.

Wardznski, Michal. 2004, "Zwischen den Niederlanden und Polen-Litauen: Danzig als Mittler niederländischer Kunst und Musterbüchern", in: M. Krieger / M. North (ed.), *ibid*, 23-50.

（韓国海洋大学校国際海洋問題研究所 HK 研究教授）